

ひとひと
ともに担い ともに築く 女と男の情報誌

ねっとわあく

2014/10/31 Vol.64

つなぐ
つながる
つなげよう



静岡県

「つなぐ」「つながる」「つなげよう」

2011年3月11日の東日本大震災以降、人と人との絆の大切さが繰り返され、繰り返して語られてきた。「絆」の文字に失われた18,500余りの尊い命への鎮魂と津波や福島第一原子力発電所事故で断たれた地域コミュニティへの無念さが凝縮する。

戦後70年、私たちの回りの「絆」は大きく変化した。家族の絆、仲間との絆、地域の絆を結び、より強固にする努力より、とすれば個の時間を大切にすることを優先してきた。その一方で見えない新たな「絆」を求め、SNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)で交流を図る人も増えてきた。「ねっとわあく」6号では、「つなぐ」「つながる」「つなげよう」をテーマに「絆」について改めて考えてみた。

「つなぐ」では、「つなぐ」きっかけを自ら作り出した「人」を取り上げる。地域を巻き込んだ介護サービスを行う見野孝子さん(浜松市)。助けて欲しい人と力になりたい人を結ぶネットワークを構築する杉本彰子さん(静岡市)。発達障害児の放課後デイサービスを立ち上げ、「つなぐ」第一歩を踏み出した津川祥吾さん、裕子さん(藤枝市)を取り上げる。

「つながる」では、地域の人的資源を結び合うことで、地域の再編を図る動きにスポットを当てる。最近、活発な市民活動が話題を呼ぶ島田市を紹介する。また、孤立する高齢者を支援するため、浜松市が整備を進める「はままつあんしんネットワーク」、地域の人材活用を図る「家事支援ふれあいサービス」と地域のシニア力を生かす「現役っこクラブ」を取り上げる。

「つなげよう」では、絆が希薄となった現代社会で地域の人々の助けを必要とする子育てについて考える。子育て中の親を支援するNPO法人「peace of peace」と子育て応援サークル「いちご」の活動を紹介する。



介護の世界に新風を! 地域力を巻き込んだ介護を 実践して26年



(株)LC ウェルネス代表取締役
みのたかこ
見野 孝子さん(浜松市)

見野孝子さんが県内初の民間在宅ケアサービス「ライフケア浜松」を立ち上げたのは1988年。今から26年前である。当時の高齢化率は、12%であった。しかし、当時も介護を理由とした一般病院への「社会的入院」や寝たきり老人の家族介護など、高齢者介護は社会問題化していた。

「介護保険制度が導入される前の80、90年代の高齢者介護は、家族が介護して当たり前というシャドーワーク、アンペイドワークでした。姑の介護をする嫁の唯一の外出は、月に一度、ヘルパーに預けて親の墓参りに行くだけ。介護される人はもちろんの事、する人も家の中に閉じこもって介護をしていた時代でした」

地域をつなぐ活動の原点は、大阪のおばちゃんから受けた手助け

見野さんが市・社会福祉協議会で訪問介護ヘルパーをしていた頃、担当する家の老老介護の妻が倒れた。残された夫の介護を誰がするのか、緊急の案件でも、当時の行政機関が運営する訪問介護事業は、時間制限など、制約が厳しかった。

「なら、『他人以上、身内未満』の介護を自分ではじめよう!と思いました」
他人以上、身内未満の手助けとは、見野さん自身の体験に根ざす。

「20歳で結婚し、初めてのお産を知り合いが居ない夫の転勤先の大阪で迎えたのね。すると、それまで挨拶ぐらいいしかしてこなかった近所のおばちゃんたちが実家の母が手伝いに来るまで、入れ替わり立ち代わり手伝いに来てくれるの。赤ん坊の沐浴から私の食事、手伝いに来た母の食事まで作って持ってきてくれる。人って温かい

な。ありがたいな。心から思ったわ」
いつか、社会に恩返しをしたいという思いが会社の設立を後押しした。

「恩返しともう一つ、介護現場をアイデアと工夫で改善したいという思いが強かったからかしら。思いとは、介護現場に関わる、人の貧しさの改善です。介護を手助けする人の処遇を改善して、介護労働を独立した社会的使命を持った職種にすることでした。同時に義務感や世間体にも手助けができればと思いました。そのためにも、地域の人々の手を借りよう。そう、私を手助けてくれた大阪のおばちゃんたちのような地域の力です」

地域も介護も人が財産

2001年、見野さんは、訪問介護事業だけではなく、地域に根ざした通所介護施設「ここ倶楽部」を開設する。東日本震災以降、地域力が見直されているが、その10年以上前から地域の力を活用し、地域のニーズに合わせて活動の輪を拡げてきた。

「人は必ず死を迎えますが、肉体の死の前に社会や友人など、様々な関係との死を迎えなければなりません。社会との関わりを少しでも長く保ち、介護度を上げずに生き生きとした日常生活を送るためにも『ここ倶楽部』が地域の人々の居場所、行き場所、生きる場所となるよう、様々の試みをしています」

と語るように、見野さんは今まで身につけてきた介護現場でのノウハウと様々なアイデアを軸に、ユニークな取組みを展開する。その一端を紹介する。



「人は財産。地域介護に必要なのは、やはり、人」と、続ける「人材養成」活動。県内外各地で800人の福祉に携わる人材を養成してきた。

「生涯現役!生き生きシニアライフの創造。高齢者を支援される側から支援する側に」をモットーに、地域のシニア世代を巻き込む「現役っこクラブ」の活動(詳細はP6)。

人は誰しも必ず老いる。その時、介護される高齢者も先の見えない介護の日々を送る介護者も、見野さんが実践する地域と人を大切にしたい介護サービスを受けたい、よりHAPPYになれそうな気がする。

1. 猿山のサルに例えたら
自分のポジションは?

時に司令塔、時に召使、
いつもほとんど何でも屋

2. 血液型は?

A型

3. あなたの現在の「繋がり度」は何%?

80%

株式会社LCウェルネス

〒430-0814 浜松市南区恩地町263

TEL 053-426-0691(代表)

E-mail: life.care@asahi-net.email.ne.jp

「現役っこクラブ」HP

http://genekikko.com/

つながりの中で 共に輝き続ける



NPO法人活き生きネットワーク理事長
すぎもと しょうこ
杉本 彰子さん(静岡市)

自らの経験が今の活動の原点に

「ボランティアは長いよ。中学の時から青少年赤十字活動を始めてね」。そう語り始めた杉本さん。今でも仕事の合間を見つけては困っている人の所へボランティアに行く。「今日の午後は、障害者さんが一人暮らしするので、お引越しのお掃除に行ってくるのよ」と、その声は何だか嬉しそうに弾んでいる。杉本さんが理事長を務める「活き生きネットワーク」の活動のモットーは「困った時に伺います」。助けて欲しい人と、力になりたい人を結ぶ活動は、杉本さん自身の経験から生まれた。

28歳の時に突然、夫を亡くし、幼い二人の子を抱えシングルマザーとして働き出した。子どもが熱を出すたびに会社を休まなければならず、肩身の狭い思いをしていた。「当時は働き手がたくさんいたから、社会的責任を全うしなければ働き続けることは難しかったのね」

そんな時に同じ共同住宅で出会ったのが、現在、専務理事を務める望月洋子さん。同世代、同じシングルマザー同士、同じ年の子どもと、共通点も多くすぐに仲良くなり、お互いが困っている時に助け合う。1983年、困っている母親を支援する「静岡働く母の会」を二人で設立。「最初から一人でやる気はなく、皆で支え合う関係。保育士さんや看護師さんにも登録してもらってね。私達も困っていた「お母さんの困りごと」の代表である病児保育や家事代行を引き受けたのよ」。3年後の1986年に「静岡ウーマン」を立ち上げたのも、清掃サービスの需要が増えたことから。「今のような規模になっ

たのも困ったことを解決していくうちに自然と大きくなっていっただけ」

支え合いのネットワークが地域のつながりの輪をより強く

皆で支え合いながら、出来る人が出来ることをやる。この考え方は、現在の「活き生きネットワーク」の最大の強みでもある。「ひとりの人を取り巻く環境、例えば高齢者ならご家族やケアマネージャー、地域の民生委員や私達のようなサービスマネージャー、色んな人が支えていると思うのね。これからは、ネットワークが大切でまさに財産。『活き生きネットワーク』も色んな所と関係をつなぎながらやっている。ひとりの人が活き生きとして生きられるようなネットワークづくりが漸く出来つつあるの。それが一番ありがたいし、嬉しいこと」。杉本さん達の「困っている人を助きたい」という強い想いが、職員同士の知恵を出し合い、持っている能力を出し合いながら支え合い、困った人と支援する人のつながりの輪を大きく、そして強くしていく。

「本当は、もっと小さな地域単位できめ細やかなサービスが理想なんだけど...」。地域のつながりについて杉本さんはつぶやく。「毎日が人とのつながりを実感しているから楽しいね。でも、まだまだ孤独な人や、支え合えるまたは支えてくれる仲間が少ない人が多い。さみしさや困った経験、泣いた経験がある人の方が人に優しくなれるのね。私は困った人がいれば絶対に放っておけないし、誰よりも優しいわよ」。杉本さんは優しいまなざしでこれからも地域とつながり続けていく。

1. 猿山のサルに例えたら自分のポジションは?
うーん、情のあるサルじゃないかな
2. 血液型は?
A型(そして、寅年のしし座)
3. あなたの現在の「繋がり度」は何%?
120%

NPO法人活き生きネットワーク
静岡県静岡市葵区安東1-23-12
TEL054-209-0700(代表)
<http://ikiki.canariya.net/>



高齢者と障害者の複合デイサービス「喜楽庭」



「喜楽庭」は和風民家を改造した造りでアットホームな雰囲気

障がいのある子とない子が 一緒に遊べる社会を



多機能型放課後デイサービス Couleur.(クルール)
つがわ しょうご ゆうこ
津川 祥吾さん、裕子さん(藤枝市)



この春、つながりの輪を広げようと、児童福祉の分野に新たに歩み出した夫婦がいる。津川祥吾さん、裕子さん夫妻である。二人が始めたのは、発達に気になる子どもたちに療育と居場所を提供する「デイサービス事業「クルール」」。良質なからだ遊びを通して、子どもの心と体や頭の発達を促す。現在、会員は約40人。毎日、20人近くの子どもたちが通う。と同時に子どもたちの発達について一人で悩む親の相談の場としての機能も、持つ。

サービスの対象は、主に「発達障害」と呼ばれる子どもたち。発達障害は、幼児のうちから発達の過程で現れ始める行動やコミュニケーション、社会適応などに課題がある障がいで、自閉症スペクトラム(ASD)や学習障害(LD)、注意欠陥・多動性障害(ADHD)などの総称とされる。他の障がいと同様、子どもに必要な支援の程度によって、地域の学校の普通級か特別支援級、または、特別支援学校に通うことになる。特別支援級や特別支援学校では適切な支援が得られる一方、他の子どもたちとふれ合う機会が減る。また、社会の理解不足などもあり、保護者も孤立しやすい。

発達障害児の子育てに悩む親を サポートしたい

発達障害児の支援を最初に思い立ったのは、妻の裕子さん。7歳から15歳までの4人の子どもの母である。

「4人子どもがいると、顔や性格が違うように成長の度合いも違ってきます。私も子育ての中で、特に長男の発達に悩む親の一人でした。しかし、子どもの発達障害の可能性を受け入れるとともに子どもが野球を始めるようになって、体も心も成長してゆくのを目の当たりにし、発達過程の子どもたちが体を思いっきり使うことで、子どもの能力が伸びてゆくことを実感しました」

そして、診断名がつかないまま、「発達障害」のグレーゾーンで悩む親たちの多い事も知る。

「子育ては母親の役割という社会の中で、子どもの発達が遅れていると、夫婦の間で意見の食い違いが起きやすいんですね。そんなお母さんの話を聴き、共感することで家庭内ケアをすることも必要だと感じました」

そんな妻の思いに共感を寄せたのが夫の祥吾さん。民主党の衆議院議員を3期務め、東日本大震災後に発足した復興庁の現場責任者としての経験を持つ。

「被災地の子どもたちの心のケアと運動不足解消のため、子どもにあそび場を提供する事業を実施し、大変喜ばれました。そこで復興後のまちづくりに子どもにあそび場の確保も検討していただくことになりました」

そしてあそび場の検討をする中で、良

質なからだがあそびが発達障害児の療育にも有効であることを知る。

「クルール」は、児童福祉法で定められた障害児通所支援制度事業。2年前に法制化されたこの制度は、財政的な制約で障がいのある子どもが学童保育などに受け入れてもらえない事を知った津川さんが、子ども政策調査会の統括副大臣時に素案を作った。

「今の日本の子どもたちにあそびが足りないことを社会的にもっと知ってもらい、あそびの中で子どもの成長を育むことができればと考えています。将来的には、地域に病児保育も含め、障がいのある子どもが集うことができる拠点を作ってみたいと考えています」

現代社会が生み出した「障がい」とも言われる発達障害。発達障害を持つ人達が少しでも生きやすい社会の実現に向かって、津川夫妻が始めた「つながり」の輪が広がっていくことを願う。

1. 猿山のサルに例えたら自分のポジションは?

祥吾さん ポスと喧嘩しない範囲で、やりたいことを勝手にやってるタイプ

裕子さん 隅っこに座りながら、ゆったりと全体を見渡しているタイプ

2. ご夫妻の現在の「繋がり度」は何%?

祥吾さん 繋がっているつもりで実はあんまり繋がっていない70%

裕子さん 繋がっていないふりをして実は結構繋がっている70%

多機能型放課後デイサービス
Couleur.(クルール)

〒426-0201 藤枝市下藪田75-2 八興ビル1F

TEL 054-639-5230(代表)

E-mail: info@couleur.jp.net

Couleur.(クルール) HP <http://couleur.jp.net>